

◆ かつば民話シリーズ⑤ ◆

相模の河童桜の宴へ

さがみのかつばさくらのうたげへ



作:近藤せいけん



相模の国に相模川にすむ、太郎河童はいつも一ぴき、孤独で寂しい日々を送っていた。

「ああ～誰か、仲間がこないかなあ」

「一ぴきじゃ、寂しくて気がおかしくなりそう」

「話あいてが欲しい、あそび仲間がほしい～」

「一ぴきじゃ、生きていけない」

そこで、太郎河童は「大山の天狗様」にお願いすることを思いついた。

そして、願いがかなって、大山の天狗様のお使いワシ殿が、日本各地の河童族に、かっぱ語が入れたひょうたんを届けた。そして、天狗様のお使いのワシ殿は、相模の国の相模川へたどりつく乗り物として、ササで和船を作った。

河童族の足として使える船が何そうもできた。

河童族は大変喜んだ。

「この船があれば、遠い相模の国まで寝ていてもいける」

「ようし！春はさくらの咲く頃一族で相模の国へいくぞ！」

「相模の太郎河童に会うのが楽しみだ」

「大山の天狗様のお使いワシ殿、たしかにうけたまわった」

「この返事をひょうたんに吹き込みますので、お持ち帰りいただきたい」

ワシ「承知した」

大山の天狗様のお使いワシは各地のかっぱ族の返事をもって、太郎河童にとどけた。

「ありがたい！お使いワシ殿、ありがたい、ありがたい」

太郎河童は喜んだ。

やがて冬がゆき、暖かな春が相模の国におとずれた。

いよいよ、太郎河童がまちにまった、各地の河童族がやって来る、さくらの宴（うたげ）の頃となった。

さくらの花がつき始めた。

太郎河童はここ数日、相模川の河口の平塚まで遠征（えんせい）して、いまかいまかと待ち続けた。

夕映えが海側からせまってきた。

「今日も見えぬか・・・」

「いたしかたない、もどるか」

その時である、数そうの和船が点に見えた。だんだん河口にせまってくる。

「太郎どん、太郎どん！わしらじゃ～およびに参上！遠野のかっぱ族、参上！」

「太郎どん、太郎どん！わしらも、参上！筑前若松のかっぱ族、ただいま参上！」

「わしらも、参上！島根の日野川のかっぱ族、ただいま参上！」

「わしらも、参上！五島列島の河童族（ガータロー）、ただいま参上！」

数十隻の和船がぞくぞくと相模川河口に乗りいれてきた。どの船からも「ワァー」という歓声があがり、ある船はふなべりをたたき、拍子木に似た（かっぱ拍子木）を打ち鳴らし、また竹で作った横笛（かっぱ笛）を鳴らし、にぎやかに入って来た。

各船には色とりどりの長いのぼり旗が風にまい、美しくもあり、楽しげであった。

太郎河童は大いに驚き、涙をながして歓迎した。先頭の和船に乗り移り、河童族と抱き合い、かっぱ語で挨拶を交わした。

「よう、来ていただいた、本当によう来てくだされた！」

「この相模の国にようこそ、こられた！」

「ありがとうござる、ありがとうござる」

つぎつぎと船を乗り移り、各河童族と涙を流し、抱き合った。そうして、ひととおりの挨拶が終わると、先頭の船に戻り、声をはりあげた。

「ご案内つかまつる！」

「あとにつづかれよ！」

「いざ、いざ、まいらん、相模の河童さくらの宴へ」

(終わり)